５回の中国語短期語学留学を振り返って

永井智香子

キーワード：中国語短期語学留学、北京教育学院

１．はじめに

平成18年度より、留学生センターでは毎年９月に大学教育機能センター、国際交流課の協力を得て日本人学生のための３週間の中国語短期語学留学を実施している[1)]。派遣先は長崎大学教育学部の学術交流協定校である北京教育学院の国際言語文化学部である。

第一回目はわずか８名の参加であったが、その後、順調に増え、平成22年９月に実施した第５回目の短期語学留学には42名が参加した。長崎大学の学生のために作られる、いわゆるテーラーメイドプログラムである。それゆえ、容易に内容の変更が可能であるという柔軟性を持ち合わせている。事実、この５年間、北京教育学院側と話し合いを重ね、よりよいプログラムにすべく改善を加えてきた。

筆者は第一回目から第五回目まで前半の約10日間、引率者として参加した。参加学生と同じ寮に滞在し、中国語や文化のクラスを見学したり、また、見学プログラムに参加することを通じて、学生の中国語の上達ぶりに目をみはったり、また、積極的に国際交流を楽しんでいる様子に頼もしさを感じたりしたこともある。わずか３週間の語学留学であるが、参加した学生に帰国後よい変化をもたらす場合があることもわかってきた。

本稿は、これまで実施してきた５回の中国語短期語学留学をまとめたものである。その際に、引率者として筆者が観察したこと、感じたことも多少加えた。また、毎回帰国後学生に行うアンケートの結果や過去の参加者から寄せられた、短期留学を振り返っての“声”も合わせて紹介している。

２．中国語短期語学留学の概要

ここでは概要にあわせて、引率者として、筆者が見たり、感じたりしたことなども若干加えた。

２－１　派遣先について

北京教育学院は教員養成大学である。1998年から外国人に対する中国語教育に力を入れていて、国際言語文化学部でアメリカ、フランス、韓国、ロシア、日本などから中国語を学ぶ留学生を受け入れている。９月に現地に行くと毎年、多くのアメリカの大学からの留学生が来ている。また、個人で中国語を学びに来ている留学生にも出会う。

場所は北京市の北西部にある。近くに大きいバスターミナルがあり、元々交通の便がよかったが、それに加えて、平成22年度の第５回目のプログラム実施時には、近くに地下鉄の駅ができていて、さらに便利になった。その結果、北京市内なら学生は１週間もしないうちに地下鉄やバスを利用して自分の行きたいところに自由に行けるようになる。また、北京動物園も徒歩圏内である。

２－２　参加対象としている学生について

長崎大学では多くの学部で初習外国語を週に１コマ、２年間、つまり４セメスター４単位分勉強することが義務付けられている。中国語短期語学留学の主な参加対象者は原則として中国語を初習外国語として学ぶ２年生で、３セメスターの中国語の学習を終えたものである。９月に短期語学留学に参加し、最終テストに合格すると、最後の１単位が得られる。参加の条件として学部、学科は問わないが、毎回経済学部、環境科学部、工学部の学生がそのほとんどを占めている。今までに大学院生が１名、大学４年生が１名参加したことがある。それらの学生には、単位は認定されない。

２－３　プログラム実施スケジュール

毎年４月に全学にポスターを掲示すると同時に対象学生、つまり、２年生で初習外国語として中国語を選択しているもの全員にプリントを配布する。５月に説明会を２，３回実施し、国際交流課を受付窓口として応募を受け付ける。６月中旬から下旬に募集を締め切り、参加者が決定する。７月と出発前の８月下旬にそれぞれ、参加決定者に対する派遣前オリエンテーションを

実施する。現地到着後はプログラム初日に開講式、オリエンテーション、プレースメントテスト（筆記と口述）が実施される。学生は10人前後の少人数クラスに分けられ、中国語の学習が始まる。クラス担任制が取られていて、連絡事項などは担任を通じて学生に伝えられる。

２－４　過去に実施した日程と参加人数など

過去５年間に実施した日程と参加人数は表１の通りである。８月下旬から実施したこともあるが、基本的には実施時期は９月である。８月はお盆が有り、航空運賃が高く、しかも北京の夏は非常に暑いため実施時期として適当ではないからである。過去５年間の参加人数は表１の通りであるが、第５回目に参加者が飛躍的に増えていることがわかる。これは、回を重ねるにつれ、学生に参加を勧める中国語教員が増えたことや、参加経験のある学生による口コミ効果が大きいからであると思われる。

	日　　程	参加人数
第１回	2006年９月２日（土）～９月23日（土）	８名
第２回	2007年９月１日（土）～９月22日（土）	18名
第３回	2008年９月６日（土）～９月27日（土）	14名
第４回	2009年８月27日（木）～９月17日（木）	25名
第５回	2010年８月28日（土）～８月18日（土）	42名

表１　過去５年間実施した日程と参加人数（第２回目に１名、３回目に２名、５回目に１名、大学職員が研修として参加したが、参加人数からは除いている）

２－５　住環境と食事について

参加学生は全員留学生寮に入る。寮は教室や食堂などと同じ敷地内にある。寮には管理人が24時間体制で常駐していて危機管理に問題はない。基本的には２人一部屋であるが、希望する者は差額を支払えば、一人部屋に入ることができる。５年間を通じて、一人部屋を希望したものは一人である。部屋割りは派遣先が決める。

食事は３食バイキングで、決められた時間に食堂に行って食べる。食堂に

は担当の女性スタッフがいて、食器を洗ったり、飲み物を用意してくれたりする。食べたいものがある場合、そのスタッフに伝えると翌日出てくる場合が多い。毎年学生たちはスタッフと、互いに身振り手振りを交えながら中国語でのやり取りを楽しんでいる。また、学生に中国語を教えてくれたりもする。

2－6　プログラムの内容について

プログラムは大きくわけて中国語の学習、文化のクラス、交流プログラム、見学プログラム、中国語劇の準備と発表の5つに分けられる。

2－6－1　中国語の学習について

中国語のクラスは基本的に午前中（9時から12時）に行われる。北京教育学院のスタッフ、教師には日本語ができる人が一人もいない。そこで、授業は媒介言語を使うことなく中国語だけで行われる。中国語のクラスの特徴は非常に実践的なことである。これは5年間を通じて変わらない。たとえば、初日の最初の授業が「言語実践」である。外で中国人にインタビューをする課題が与えられる。ある年の課題は「西単へ行くにはどのバスに乗ったらよいか」「美容院で髪を切るのにいくらかかるか」などであった。学生は2人一組になり、その課題をこなさなければならない。結果は中国語のクラスで発表することが義務づけられている。筆者はインタビューをする学生の様子を見に行ったことがある。もちろん、中国人に話しかけても完全に無視されて困ったという学生もいるが、ほとんどの中国人は非常に親切に答えてくれるようである。そのほかに毎回必ずあるのが、値切る練習と道をきく練習である。事前に教室の中でロールプレイをしたあと、学生たちは一人10元ずつ与えられ、これも2人一組になり、中国人に道をたずねながら少し離れた卸売り市場まで行って、買い物をする。そして、翌日のクラスではどんな買い物ができたかクラスで買ったものを見せながら報告し、もっとも安い買い物をしたものに賞品が与えられる。

テキストは『汉语会话301句』である。このテキストで使われている会話の場面設定はすべて北京である。見学旅行で王府井に行く前の授業では王府井での会話の部分が使われ、雑技を見に行く前には雑技についての会話の部分が使われる。このように住環境に非常によく合うテキストが使われている。教師はロールプレイをふんだんに取り入れて、授業を進めているので、日々

の学習がそのまま、日々の生活につながるようになっている。その結果、長崎で多い場合は50人以上という多人数のクラスで中国語を勉強していた学生は最初非常に戸惑うが、１週間もすると耳が慣れてきて簡単な中国語が聞き取れるようになるばかりか、言いたいことが少し言えるようになり、学習が面白くなってくるようである。

２－６－２　文化のクラスについて

文化のクラスは午後に不定期に１時間半行われる。平成22年の場合は中国の歌、中国切り紙、太極拳が２回実施された。これ以外に過去５年間に実施された文化のクラスにカンフー、書道、中国結、水墨画がある。カンフーは太極拳と変わらないということで、書道は日本の書道と変わらないと不評だったので、中止された。水墨画と中国結は評判がよかったが、平成22年度はプログラム後半に午後の自由時間を増やすということで行われなかった。

２－６－３　交流プログラム

たとえば、平成22年度９月に実施された交流プログラムには中国の大学生との交流会が２回、日本語を学ぶ学生との交流会が１回、ホームビジットが１回実施された。平成21年度までは大学生との交流会は１回であったが、より多くの交流の機会をという希望を伝えると２回に増やされた。また、平成22年度の日本語を学ぶ学生との交流会は初めての実施であった。

中国の大学生との交流会は一対一で話すのではなく、日本人の学生も中国人の学生も３、４人ずつの小グループに分かれて行われる。平成22年度の場合は１回は食堂で夕食を食べながら、もう一回は餃子をともに作りながら行われた。

２－６－４　見学プログラム

行き先などに毎回多少の変更があるが、だいたい毎年行くのが「万里の長城」「天安門と故宮博物院、王府井」「頤和園」「中国雑技鑑賞」「茶館」である。「万里の長城」と「天安門と故宮博物院、王府井」は一日かけての見学となるが、そのほかのものは午後や夜の時間に行われる。

北京市には世界遺産が多く、興味がある学生は自由時間に訪れている。

2－6－5　中国語劇の準備と発表

クラスごとに最終試験終了後に発表する。内容は自由であるが、留学中の経験や人との交流なども内容に取り入れられるようである。留学の後半にさしかかったころから準備を始めるが、中国語のせりふを作って練習することを通じて、中国語が上達するだけではなく、クラスメートとの絆もより深まるようである。

2－7　プログラム終了後のフォローアップ

第1回目から第5回目まで、プログラム終了後に中国語担当教員がボランティアで希望者に週に一度の中国語特別クラスを留学生センターの教室を使って開講している。語学留学に参加した多くのものがクラスへの参加を希望するが、実際に参加しているのは毎回参加者の約半数である。クラスは学習希望者がいる限り続き、帰国後1年半続いたグループもある。

3．帰国後実施したアンケートの結果

第一回目のアンケートの結果は、2007年の留学生センターの紀要にまとめた[2)]。ここでは第2回目から第5回目までの記述式のアンケートの結果を紹介する。2回目から5回目まで、実施年度によって回答の内容に大差はなかったので、年度別に分けての紹介は行わない。また、紹介する際、学生が書いたものを多少簡略化してある。

3－1　最もインパクトが強かったことは何か

これは毎回問う質問である。第2回目から5回目までの得られた回答に、万里の長城に行ったことをあげているものが多いが、それ以外に、たとえば、以下のような回答があった。

・中国語に囲まれているという環境（複数類似回答有り）。
・中国人の人間性。繕いの優しさが全くない分、本当の優しさや暖かさがとても身にしみた。日本では他人には無関心なことが多いが、中国ではそんなことがない（複数類似回答有り）。
・マスコミの報道などにより中国のイメージは行く前は悪かった。しかし、実際はそうではなかった。中国人は人柄がとてもよく、親切で、日本人より純粋かもしれない（複数類似回答有り）。

・中国のものの安さ（複数類似回答有り）。
・授業初日に町の人と話すことを強要されたこと。
・中国語を学ぶ意欲が喚起されたこと。
・買い物に関すること（ねぎったこと、あとで買わないと言ったら追いかけられたこと、買い物で高い値段をふっかっけられたこと、店員の強引な客引き（複数類似回答有り））。
・交通、道路に関すること（ルールがまったく守られていないのに、事故が少なかったこと、信号無視すること、人より車優先、大気汚染）（複数類似回答有り）。
・ホームビジットで行った先の家の大きさ。
・実践的な授業が多かったこと。
・異国で生きるためには自分から行動しなくてはならないことを思い知ったこと。
・英語が通じないこと。
・景山公園から故宮博物院を見たこと。
・人の多さ。
・中国の学生が台湾を忌み嫌っていることをはっきり言ったこと。
・中国料理の辛さ。
・地下通路などに物乞いの人がいること（複数類似回答有り）。
・トイレ事情（トイレットペーパーを捨てないことなど）（複数類似回答有り）。

以上、すべてではないが、これらの回答から学生が中国を肌で感じている様子がよくわかる。

３－２　自由記述蘭から

毎回アンケートの最後に「その他、何かあれば自由に書いてください」という蘭を設けた。たとえば、以下のような回答が得られた。複数類似回答が見られたものも多い。

・中国にいる間、ずっと「帰りたくない」としか言わなかった。それほど、毎日が楽しく、充実していた。満足している。有意義な３週間だった。貴重な体験だった。安い金額で勉強も観光も食事もできて、満足している。

・これを機に国際交流のために語学をがんばりたい。
・異文化を知ることの大切さがわかった。
・学部の枠を超えた友人ができた。中国人も含め多くの友人を得た。
・帰国後しばらくは脂っこいものが食べられなかった。
・よい中国語の勉強の機会になった。そして、中国語をもっとやりたいとやる気が出た。帰国後、中国語検定３級に挑戦したい。
・帰国後、何にでも挑戦しようとやる気が出た。積極的になれた。
・安い金額で勉強も観光も食事も出来てよいプログラムだ。
・中国の文化に触れ、感動することや衝撃的なこともあり、大変勉強になった。
・もっと長い留学をしてみたい
・いろいろな中国を見た上で、中国のことが好きになった。
・もっと中国語を勉強してから、もう一度、中国に行きたい。
・プログラムに参加したことによって、中国語や中国に関することに興味を持つことができた。
・同じプログラムに参加した仲間のみならず、中国人とも、他の国から来ている人とも仲良くなれた。
・３週間で少し自分自身成長できたと感じている。
・言語を勉強するには、その言語を使用する国に行って学ぶべきだと思った。
・現地で他の国から来ている留学生と接して、自分の甘さや日本での生活の無駄の多さに気づかされた。
・参加して今度やりたいことが増えた。
・现在，我很高兴。因为我去中国，看多地方，认识很多人。我很喜欢中国!! 我想在来北京。・・・・・・・・・

上記の多くの記述から、わずか３週間の語学留学ではあるが、人生の何かのよいきっかけになっていることがわかる。また、一人であったが、最後の自由記述蘭のみ中国語で書いていた。中国語で書かれていること、それだけで、読むとなぜかインパクトが強い。

４．語学留学を振り返っての“声”

過去のプログラム参加者数名がメールやレポートで短期語学留学を振り返っ

ての感想を寄せてくれた。また、インタビューをしたものもいる。ここではそれらを紹介する。メールやレポートは基本的には原文のまま、インタビューは聞き取ったことを筆者がまとめたものである。

（第４回目の参加者、メール）私は短期留学に参加して、語学を学ぶ楽しさを知りました。実際に現地に行くと日本語は通じません。そのような環境の中で、自分の思いや気持ちを伝える難しさを肌で感じました。しかし、それ以上に伝わった時の嬉しさや感動は忘れられないものです。徐々に相手の言っている事が理解出来たり、伝えたい事が伝えられたりすると、もっと勉強したい、そして中国語を話せるようになりたいと強く思うようになりました。日本でも中国語の授業はありましたが、こんな気持ちにはなりませんでした。心から学びたい、もっと勉強したいと、思えたのもこの短期留学に参加したからです。何でも学ぶ時には、この気持ちが大事なのではないかと思います。こんなに勉強が楽しいと思えたのも久しぶりでした。現地の文化や人と触れ合えた事も私にとって貴重な経験で、この短期留学に参加出来て本当に良かったと心から思います。

（第４回目の参加者、メール）中国留学は、私の大学生活の中で一番の思い出ですね。あんなに楽しい３週間はなかったです。異文化に触れたことも刺激があってモチベーションの向上にも繋がったし、あとは何と言ってもＴ（参加者の一人）との出逢いです。きっとこの出逢いが留学で得たものの中で一番大きいです。とにかく、この留学のおかげで、私は自分の殻を破りました!! 大学で自分を出せるようになったというか…あと、すごく前向きになりましたね。今年も行きたいとＴとほざいているところです。

（第４回目の参加者、メール）私にとってあの３週間が初めての海外でした。全く知らない土地で、言葉も通じないという環境はとても新鮮でした。普段日本の中にいると当たり前であることが、海外に出ると当たり前ではないということにとても衝撃を受けました。食べ物の違い、歴史の深さ、土地の広さ・・・このようなことは日本にいるだけでは感じることができないことです。もしあの時、思い切って行かなかったらこんな広い世界があることを知らないまま大学生活を終えていたと思います。３週間の経験を通して、自分

の物事に対する考え方が変わったと思いますし自分から進んで留学生とも交流を持つようになるなど、これまで以上に積極的になることができたと思います。たった3週間でありましたがとても貴重な時間を過ごすことができたと考えます。

（第3回目の参加者、メール）留学は、本当に行ってよかったと今でも思っています。「中国人」という一般的なイメージしかありませんでしたが、中国で色々な中国人の方を見たり接したりしてやはり人それぞれ違うのだと当たり前の事を実感しました。以来、先入観を持たないようにしようと心がけるようにもなりました。また、より中国語に対する熱意も持つことが出来ました。ようやく中国語三級も合格しましたが、これからも中国語の勉強は続けていきたいと思っています。一生興味を持って続けていける事柄ができた事もよかったと思っています。また、元々中国の歴史には興味があったのですが、現在の中国にも興味が持てました。あの留学によって、行動力と興味関心の幅を広げてもらえたと思っています。

（第2回目の参加者、インタビューをまとめたもの）第二外国語が中国語だったということと、祖母が大連出身ということと、留学生のチューターをしていたということで興味を持って軽い気持ちで参加しました。4年前に初めて行ったときの3週間は言葉で表現できないくらい自分の中では大きいものになっています。オリンピック前の、日本より勢いのある国を目の当たりにして、日本より可能性があるのではないかと思いました。そして、これから、もっと関わっていきたいと思いました。帰国後、中国語を真剣に勉強し、中国についても勉強しました。日本では自分は自己主張が激しいとよく言われますが、勢いのある中国では、その積極性を認めてくれます。自分に合っているのではないかと思いました。帰国後、母と北京を訪れて、母にも中国を見てもらって、気に入ってもらえました。その後、外務省の中国訪問のプログラムに参加することができて、そのときに中国の地域格差と中国の広さを体で感じました。そして、今年の3月上海で2週間中国語を勉強して、北京は政治の中心で、将来働くなら、上海だと思いました。語学留学はたった3週間ですが、さまざまな可能性があるものでした。日本にいると日本の常識が世界の常識だと思ってしまいがちです。そうではないことを知るためにも

すごくよい機会でした。

（５回目の参加者、レポート）私にとって中国留学は、視野を大きく広げてくれるものでした。まず、生で見た中国の現状はテレビや新聞などで得ていた情報よりずっと心に残るものでした。普段の食べるもの、着るものがないというレベルではありませんが、例えば都市の中にぽつんと古い長屋があって格差を感じたり、市場の人達が商売している姿、というより生活しているところに自分たちが入り込んでいるような不思議な気持ちになりました。また、地下道の環境の悪さ、ホームレスの姿を見るのも心が痛みました。この気持ち、あの光景は今後もずっと忘れることはないと思います。10代のわかいうちに考えさせられるチャンスを与えていただいたことに感謝しています。また、「中国の人が日本に偏見を持っている」というのが私の、日本人の偏見なのだな、と気づかされました。生の中国人と触れ合ったことがないのに、勝手に中国人の考え方を決めてしまっていたら、今後も日本と中国の関係が良好になることはないと思います。私たち一人の意識からでも、知らずに非難するのをやめ、中国のいい面を沢山知ってつきあっていくようにしていくことが大切だと思います。

（５回目の参加者、レポート）語学の勉強の場として本当に良い機会でした。たとえば、授業で道の尋ね方を教わったあと、二人ペアで指定された目的地まで中国人に尋ねながら自分たちの力でたどりつくということをしましたが、これは本当に自分のためになりました。これがなかったら、冒険するのが苦手な私は個人で買い物に行って、値引きをするといったことは最後までできませんでした。私は人見知りをついしてしまうのですが、中国に一緒に行った友達とは本当に仲良くなれました。中国では学校などとは違う素の自分でいられたと思います。本当に毎日楽しんでいました。中国に一緒に行ったメンバーと２回ほど飲み会がありましたが、2回とも本当に楽しかったです。中国人の人は優しいです。第一印象は大声でどなっているイメージで怖かったのですが、話しかけたり、一緒に遊んだりしていると、本当に優しくて楽しくなりました。

以上が過去の参加者７名の短期語学留学への参加を振り返っての“声”である。中には社会人になっているものも二人いるが、何年たっても３週間のプログラムは人生の中にしっかりと刻まれているようだ。そして、短期間であっても、実際に異文化に触れるということが人に大きい影響をもたらすことを感じずにはいられない。

５．引率者として思うこと

筆者は５回に渡って引率者として前半のプログラムに参加してきた。そして、特に最初のうちはプログラムについて少しでも疑問に思うこと、また、改善してほしいことは何でも伝えてきた。第３回目のとき、「あなたは細かい」と中国側のスタッフに言われたことを今でもはっきりと覚えていて、忘れられない。スタッフが何気なく、言った一言である。あらためて中国人の言動や行動を思い起こすと、物事を大きい枠でとらえていて、小さいことにはこだわらないようだ。そのような人が多いと思われる国で学生のためと筆者は必死に細かいことを訴えていたのである。以来、中国における語学留学の引率者とはどうあるべきか考えるようになり、少なくとも以前のように細かいことにこだわらないことにしている。５回引率者としてかかわってつくづく思うことは、これはあくまでも筆者の個人的な見解であるが、中国では仕事においてもルールより人間関係が優先されるということである。引率者としてよい仕事をするには、派遣先のスタッフとよい人間関係を築くことが第一である。しかし、そこは異文化である。筆者は、中国での仕事がらみのよい人間関係とはどういうものなのか、どうやって築くものなのかまだよくわからない。試行錯誤はまだまだ続きそうである。

６．おわりに

５回実施してきて、今までに107名の学生が参加した。アンケートを提出した者全員が行ってよかったと答えている。「可愛い子には旅をさせよ」とはよく言ったもので、若いうちに、たとえ短期間でも、海外留学をすることは非常によい効果をもたらすと思う。これからもより多くの学生に参加してほしい。そして、得るものが多く、満足してほしい。参加学生の中には初めての海外という者も少なくない。そこで、過去５回のように今後参加者全員が満足するプログラムであり続けるには危機管理に特に注意する必要がある。

引率に関してであるが、１回目から４回目までは前半を筆者が、後半を中国語の教員が引率者として参加した。予算の都合上、第５回目は前半のみの引率となった。派遣先に日本語ができるスタッフが一人もいないことは語学を学ぶ環境としては非常によいが、何かあったときには困ることとなる。テーラーメイドのプログラムであり、参加人数も増加している。引率の必要性は高いと思う。第６回目以降は引率の予算は問題がないということである。

北京教育学院国際言語文化学部と留学生センターは３年ごとに短期語学留学の合議書をかわしている。平成23年度のプログラム終了後には三度目の合議書の見直しが予定されている。平成23年度の９月には６回目の派遣が予定されている。とにかく、気を引き締めてのぞまなければならない。

注

１）第１回目については永井智香子（2007）「第１回中国語海外短期語学研修実施報告－参加学生が書いたアンケートとレポートを中心に」『長崎大学留学生センター紀要』第15号、永井智香子・村瀬隆彦（2006）「長崎大学における大学間交流の新しい取り組み」『留学交流』に詳しい。

２）前掲書『長崎大学留学生センター紀要』第15号参照